

花嫁の日

平岩弓枝



花嫁の日

平岩弓枝



講談社

花 嫁 の 日

980 円

第1刷発行 昭和47年4月8日

第15刷発行 昭和53年4月21日

著者 平岩弓枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・風丁本はお取り替えいたします。 © 1972 平岩弓枝

0093-300739-2253 (2) (文2)

花嫁の
日
目
次

誘 恋 明 恋 化 脚 姉
蛾 も つ
燈 れ 暗 人 粧 光 妹

一 二 三 四 五 六 七

去り行く夏
蜜の匂い
婚前旅行
再会
吉凶
由紀の結婚
恋とは
花嫁の日

一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇

装
幀
生
沢
朗

花
嫁
の
日

姉 妹

六月になって、最初の土曜日の夜であった。

東京、目黒にある向井家では宵のうちから笑い声が絶えなかった。

応接間の主役は、長女の阿紀であった。父親と母親の容貌の、美しい部分ばかりをもらって生まれたような、あでやかな娘であった。すらりと伸びた大柄な姿態にトリコットのミディアのワンピースがよく似合った。

客がひとり。

石川公一といって、これは阿紀の父親である向井吉雄の親友で、医者でもある石川俊介の長男で、やはり医者のお卵であった。

「初日があく前って、大女優の結城先生でもどきどきなさるそうよ。必ず、夢をごらんになって、それが衣裳とメーキャップもつけないで舞台へ立っている夢なんですって……」

声も華やかによく透る。短大を卒業して、すぐ新劇の研究生になり、今年が二度目の舞台だ

った。初日が明日である。

「そりゃ、結城美江子クラスなら、どきどきもしようさ。阿紀ちゃんみたいに台辞せりふがひとつもなくて、主役の傍に突っ立ってるだけでもどきどきかい」

幼な馴染だから公一は遠慮がなかった。

「今度は台辞がありますよ」

「へえ、どんなの……」

「明日、お花を持って来てくだされば、わかります……」

気どって脚を組んだ。形のよいので自慢の脚である。

「たぶん、いらっしやいませ、とか、おやまあ、とか、あってもなくてもいい台辞だな」

父親の吉雄は長椅子にもたれたまま、笑っている。機嫌はよかったが、どこか疲れているふうで、顔色もよくない。

「失礼な、幕があいたら驚くわよ」

「どこに居るのか、わからなくてね」

応接間の笑い声をききながら、次女の由紀は台所でフルーツゼリーを皿に盛っていた。

阿紀とは三つ違いの姉妹だが、小柄なのと、稚なさの残っている表情がどうかするとまだ十代に思われた。性格もどちらかというど味で、白いブラウスや格子のエプロンが身についている。

今年、短大を出て、料理学校へ通っていた。

家には、他に、姉妹の死んだ母親の代からこの家で働いている小林くめがいる。母親がとか

く病身だったこともあって、姉妹の幼時は、くめが母親がわり、乳母がわりであった。

特に、下の由紀は、母親よりもくめの愛情を深く受けて育った。

「ねえ、どうかしら、おくめさん、味をみてね……」

ゼリーのひと皿を台所のテーブルの上へおいた。もうひと皿を、並べておく。お盆にのせたのは三人分だけであった。

「由紀さまも、応接間で召し上がって下さいまし。もう台所はあたしひとりでたくさんですから」

くめが慌てて、由紀のゼリーをお盆にのせようとする。

「いいの、あたしはあとで……。まだ、ちょっと用があるのよ」

「ご用は、くめが致しますよ」

「あたしでなければ駄目なのよ。お父さまを休ませてあげたいの」

ああ、とくめがうなずいた。

「旦那さま、このところ、お疲れでございますね」

「石川の小父さまにいつべん診て頂くように勧めているんだけど……」

「坊っちゃんまのほうではいけませんか」

「だって、公一さんは小児科なもの」

笑って、台所を出た。

今月にはいつてから、父が疲れ気味なのを由紀は気にしていた。普段、丈夫すぎる父親であった。物心ついてから、由紀は父が病気で寝ているのをみたことがない。

健康にも自信があつて、F大の文学部の部長であり、他に講師として二校か三校、大学を駆けもちしていた。専門は日本文学の中世だが、講演にもまめに出かけるし、出版の仕事も精力的であつた。

経済的な必要にもせまられていたし、妻のいない生活のアンバランスを、仕事で埋めていたともいえる。

だが、その父は来年は還暦であつた。

ぼつぼつ、父に楽をさせたいと由紀は思い続けている。本当なら短大に進まず就職したかったのだが、父はどうしても許さなかつた。

「阿紀は好きで、演劇の道をえらんだのだから、結婚が遅れるのもやむを得んが、由紀にはなるべく早く、よい伴侶をえらんでやりたい」

というのが、父親の口癖であつた。実際、友人にも頼み、見合いの話を内々で進めている気配もあつた。

フルーツゼリーを運んで応接間へ行くと、阿紀が美しいリズムで詩を暗誦あんじゆしていた。終わるのを待つて、由紀はテーブルへ皿を並べた。

「まだ、習いたてで、おいしいかどうか、わからないの」

はにかんだ娘へ、父親は微笑した。

「由紀の作るものは、なんでもうまいんだ。さっきの中華料理もけっこうだったよ。公一君も感心している……」

「この子、料理の天才なのよ。掃除もうまいし、アイロンかけも抜群よ。嫁さんしたら、こ

んな重宝な子、ないと思うわ」

フルーツゼリーをとりあげて、阿紀が片眼をつぶった。

「そういつてくれるの姉さんだけよね」

「男なら、お嫁にもらってあげるんだけどね」

姉妹の他愛もないやりとりを父親は満足そうに眺めていた。

「ねえ、由紀、明日、また楽屋まで荷物運んでね。重いもの持つと、あとで舞台へ出た時、手がふるえて困るのよ」

「重いもの持たなくなつたって、ふるえるんだらう、阿紀さんは……」
と公一。

「もちろん、持つて行くわ。化粧箱の用意も出来てるし……。タオルもパフも余分にいれておいたけど……」

由紀は楽しそうであった。

「本当はね、由紀が楽屋にいてくれると、とっても助かるのよ。衣裳着るのも、化粧落とすのもひとりじゃ大変だし、つくづく付き人が欲しいなあと思っちゃう……」

「おいおい、それじゃ、由紀は付き人か」

父親が苦笑した。

「そういうことになつちゃうわよ。かけ出し女優が付き人なんか連れてたら……先輩から大目玉くっちゃらわ」

かけ出しは、舞台へ出ていても、先輩女優の身のまわりの世話や、小道具の点検などの責任

を持たされる。この世界では先輩後輩の序列は、まだまだきびしかった。

「そうだ。タオルのガウン、だいぶ古くなっちゃってるわね」

楽屋着であった。

舞台化粧で汚れが激しいから、洗濯も頻繁ひんぱんで、花柄の色彩がどうしてもはげてくる。

「あたしのと、とり換えておいたわ」

なんでもなく由紀がいった。

「いっしょに買って頂いたの、まだ、あたしは使ってなかったから……。そのかわり、お姉さんのお古、ちょうだいね」

「ありがと……助かったわ」

阿紀は口では礼をいったものの、それが当然という顔をする。

「なんだ。由紀はいつも、姉さんのお古ばかりじゃないか」

「この子、けちで、なかなか新しいのおろせないのよ」

「それで、なにもかも、新しいのをおまえにとられてるんじゃないな」

父と姉の会話に、由紀は気まり悪そうに笑った。

「あたしって、お古のほうが安心なんです。それに、お姉さんの楽屋着は、いろんな人の眼につくから……」

洗いざらしじゃかわいそう、という妹を父親はいつものことながら、感慨深くみつめた。

同じ姉妹なのに、性格はこうも違うものかと思う。

どちらかという、妹のほうが、なにかにつけて姉をかばうのである。お姉さんがかわいそ

うという表現を、よく由紀は口にした。

親の眼からみると、かわいそうなのはどっちだといいたいこともある。服からハンドバッグ、靴に至るまで、由紀が新しいものを使っていることはほとんどなかった。

「阿紀ちゃんは凄腕だからな、小遣いまで、由紀ちゃんにみつがせてしまいうらしいから……」
公一がすっぱぬいた。これは、父親には初耳であった。

いけない、と娘たちをたしなめようとした。

いくら、妹の性格でも一事が万事、それでは、おたがいのためにならない。

それを言葉にしようとして、舌がもつれた。

無意識に立ち上がろうとする。体が前へ泳いだ。

「お父さん……」

「小父さん……」

何本かの手が、吉雄を支えた。それが、父親の最後の記憶だった。

父親は逝った。

高血圧から冠状動脈不全を起こし、その結果の狭心症の発作であった。

親類が遠方であり、日頃、それほど交際も深くない。

葬儀は結局、父親の友人たちが中心になって手配された。

公一の父親の石川俊介と、A新聞の文化部長である榎原智男が、高校からの親友である。

阿紀の舞台は、てんやわんやであった。初日から父の死と、通夜と続いて葬式と。それでも、阿紀は舞台に穴をあけなかった。

台辞もとちらないし、きちんと舞台をつとめている。

父親が世間に名の知れた学者だったので、初日に父親を失い、しかも舞台をつとめている新人女優として、阿紀を紹介する新聞記事が出て、週刊誌のインタビューもあった。

「皮肉なものだね。お父さんが逝ったのが阿紀ちゃんの女優としての宣伝になるとは」榊原が苦笑した。

無名に近い女優なのに、喪服姿が小さくグラビアに掲載されたりする。

葬儀は自宅だった。

書斎に祭壇が飾られ、玄関から廊下は全部、葬儀社の手によって白いビニールの布が敷きつめられ、土足で焼香できるようになった。

派手な交際を持ったわけではなかったが、思わぬ所から供花が贈られて、部屋も廊下も、庭までも花に埋められた。

喪主の阿紀は、主として祭壇の傍にすわって、来客に挨拶をし、由紀は台所で働いていることが多かった。

来客への茶菓や、手伝い人の食事など、由紀はほとんどひとりできてきばきと働いた。くめは思いがけない主人の急死に動転して、由紀の指図でしか働けなくなっている。

その若い女性を、由紀は台所について知らなかった。連れて来たのは榊原であった。祭壇にむかって合掌し、しばらく、じっと動かなかった。低